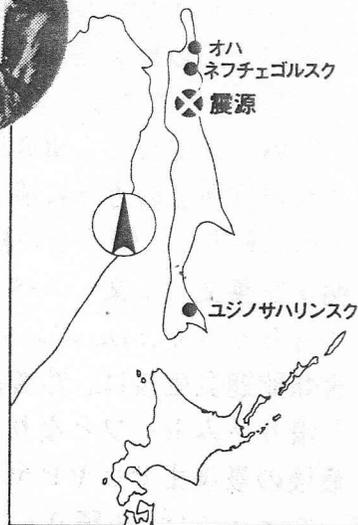


メディカル朝日 1995.7 より

緊急救援・サハリン大地震

最も早く現地入りした 国際NGO・AMDAの活躍

三宅和久 菅波内科医院内科小児科医師・アジア医師連絡協議会



阪神大震災のつめ跡がいまだ神戸の町中や人々の心にも深く残る。この悲劇を繰り返すことになったサハリン大地震が、5月27日夜発生した。推定マグニチュード7.6の巨大地震。緊急救援を活動の柱とするアジア医師連絡協議会(AMDA:本部・岡山市、菅波代表)は、まだ情報も少なかった発生後24時間で現地入りを決定。海外の援助組織としては一番乗りを果たし、緊急物資を被災者に手渡してきた。帰国後、間もない三宅医師に、活動状況を聞いた。

5月29日・出動

AMDA本部から電話があったのは5月29日午前零時過ぎ。菅波代表が「サハリンに行くことになったから」という。28日午後11時半に決定したようだ。地震の報道は寝ぼけまなこで見ていたテレビで知っていたが、当初はそれほど犠牲者が出ている様子もなく、「今回の出動はないだろう」と考えていた。しかし、次第に犠牲者の数が増え、ひよっとしたらと思いついた矢先だった。本部を兼ねる勤務先の菅波内科医院に車で行き、打ち合わせ。午前3時にはそれも終わり、自宅へ戻って荷物を詰め始めた。そして岡山空港に向かう。

前回、阪神大震災でも協力してくれた岡山県航空協会の取り計らいで、ジ

ャパンエアトラストのビーチクラフトC-90(8人乗り)でサハリンのユジノサハリンスクに行くことになっていた。空港には岡山県の肝いりでAMDAが利用している物資倉庫がある。たたき起こされたスタッフの手で、救援物資の積み込みはすでに始まっていた。500kgを予定したが、結局6席のスペースに300kgを押し込み、もう1席を菊池聡・AMDA事務局長補佐が調整員として同乗。とりあえず函館に向けて飛び立った。

本部からの情報で途中からリーダーとなる鎌田裕十郎医師(東京・かまた医院)と救急の専門家である早川達也医師(札幌市民病院)が合流するという。鎌田医師は、ルワンダ救援チームでも活躍、阪神大震災もAMDAの第一陣を担ったベテラン。函館へ入る飛行機の切符が取れないなどの情報も入る。早川医師は、本部が北海道在住のAMDAのメンバーに次々と打診して見つけたのだが、当初は勤務日程を調整しても1日遅れて参加するという話だった。

しかし、一番サハリンに入りやすい経由地を同時に探しているため、函館に着陸するかどうかはぎりぎりまではっきりしない。合流するメンバーも携帯電話で本部とのやり取りが続いたという。函館に着いてみれば、不思議なことに鎌田医師はすでに待っていたし、

早川医師も30分後に合流した。

しかし、サハリンに入るルートは確定しない。

この件に関しては、珍しく菅波代表が青い顔をして心配の塊のような状態だったという。本部は、ロシア大使館に打診、さらに、外務省、外務大臣も務めたことのある地元代議士の事務所にも頼みこんでルートを探したそうだ。菅波代表によれば、「税関で拒否されても、とにかく救援物資を押しつけてくれば少しは現地の役に立つ。入国審査が通らなくても、帰ってくればいいのだから。しかし、撃ち落とされるのは論外。なんとしても飛行の許可が必要だった」という。

幸運なことに、オホーツク航空が5月に不定期便で認可を取っていたことが判明。それも地震前に現地の着陸許可が降りていたセスナがあるという。ただし、双発の機体にはそれほど荷物が積めない。菊池調整員には無念の涙を飲んでもらい、降りてもらおう。さらに、医薬品などの救援物資を100kgに減らさざるを得なかった。点滴製剤は多分足りているだろうと判断して諦め、抗生物質、鎮痛解熱剤、消毒薬に絞ったのだ。

航路の関係からいったん女満別へ。ここで、この夜は過ごした。



毛布は背中に背負って、ヘリポートから運んだ。

5月30日・入国

出発だ。まず、稚内に飛ぶ。「本部が手続きを進めているはず。攻撃されることはないと思う」と係官に伝えると、「たぶん、大丈夫でしょう」と出国が認められた。午前9時ごろ、離陸。やっと、サハリンへ行けることになった。

地図の上ではすぐ近くなのに、ロシアの防衛線の絡みで東側をぐるりと迂回する航路だ。そして3時間後、ユジノサハリンスクに着陸した。現地は日本と3時間の時差があるという。すでに午後3時だ。

本部からの連絡で、サハリン日本協会に所属するヤン教授らが出迎えてくれ、おかげでビザは割と簡単に取れた。

到着したことをファクスで本部に連絡。「今後、被災地に行く手段の交渉、交通手段の確保を図っていく」と。そして、現地の医療状況の調査のためにユジノサハリンスクのサハリン中央病院に向かう。ロマノフ院長に会い、調査を開始した。

被害の中心となったネフチェゴルスクには死者が多く、生存者は少ないらしい。治療より検死が必要な場合が多そうだ。薬品に関しては、内服薬に比べて点滴用の輸液剤、抗生物質などの注射薬が不足している。現地の気候は夜間になると零度を割ることもある寒冷地であり、今後地震発生後の時間経過とともに、呼吸器疾患や慢性疾患の増悪が増えそうだ。

以上のことをまとめて本部にファクスする。特に、持ってくる医薬品には英語での説明書を必ずつけてほしいと要請して。英語の説明がないと、現地では使えない。

5月31日・役所回り

早川医師は1日中、サハリン中央病院に張り付き。

鎌田医師と2人で、被災地の中心ネフチェゴルスクに入るための許可証を取るために多くの役所を駆けずり回ることになる。サハリン州健康局副局長のゴルロバ・ラリサ医師が、こちらの趣旨を了解し、その協力もあって、夕方になって、やっと1枚の書類を手にした。

6月1日・ネフチェゴルスクへ

早川医師は、きょうもサハリン中央病院で救急医療の手伝いだ。

鎌田医師と2人で空港に行き、サハリン州の軍用機に物品を積み込んだ。たまたまであるが、ゴマでも活躍した報道写真家の山本将文さんとその通訳をAMDAのメンバーとしていっしょに飛ぶ形にした。こちらも通訳が必要だし、向こうも飛ぶ手段を探していたのだ。

出発予定は午前10時。だが、午後2時半になってやっと離陸。2時間10分程度でオハに到着。ここから、すぐにネフチェゴルスクに行けるものと思っていた。だが、接続のヘリに乗ろうとしても受け付けてくれない。書類はそろっているのだが、すでに手渡ししてしまっており、手元にない。

どうすればいいのかと問うと、「オハの市役所に行って許可を取れ」と言っているようだ。どうしよう。うろろろしていると、位の高そうな軍人がいた。頼み込むと「いいよ」という。その結果、そのままヘリに乗れた。

ネフチェゴルスクを上空から見る。街があった中央部だけが、瓦礫の山になり、周辺の住宅はしっかりしているという一種異様な感じがする。ネフチェゴルスクのヘリポートに着くと同時に、山本さんと通訳の姿が消えた。写真を撮りに現場にすぐに入ったのだろうが、こちらはいったいどのくらいの滞在時間があるのか判断がつかない。

時計を指さし、騒いでいると「1」というロシア語が戻ってきた。多分、1時間後には出発するのだろう。

街へは歩いて10分もかからない。大型のクレーンが動き、砂ぼこりが激しい。地面はすべて砂地に見える。人々の顔には生気がなく、笑顔のある人はいない。地震発生から6日目に当たるが、まだ絶望の中にいるのだろう。精神的な回復の途にはついていない。

棺桶が山のように積んであった。別の場所では兵士がビニールシートにくるんだ死体をトラックに積み込んでいた。ともかく、診療所を探し、現状調査を進める必要がある。探し当てたテントには、けが人がいる程度。それもかすり傷が多い。瓦礫の山で作業していてけがをした人たちで、地震の被災でけがをした人は街の外にどんどん運び出された後のようだ。テントの中には、1人の男の子が横たわっていた。

ヘリポートに戻ると、山本さんたちも戻っていた。先ほどの男の子が運ばれてきており、10歳のコーリャ君だという。この日、瓦礫の下から掘り出されたそうだ。そして、6歳の女の子、サーシャちゃんもいた。足を骨折している。ロシア人の小児外科医が付き添っており、「埋もれていて助け出されるのは、もう子供以外にはないだろう。もしかしたらこの子たちで最後になるかもしれない」という。事実、この後で助けだされた人はいなかったと聞いた。

コーリャ君は大変元気で、ヘリに初めて乗ったのがうれしらしく、途中から起きて窓の外を眺めてはしゃぎ始めた。日本の硬貨をあげると大喜び。AMDのステッカーも1枚あげた。

ユジノサハリンスクへ戻ると、ロシア語がペラペラの韓国の新聞記者が待たせていた車があり、ついでにホテルまで送ってもらう。万事がこの調子だ。

6月2日・第二陣到着

朝から役所関係の手続きに追われる。第二陣は午後9時ごろ空港に着いた。医師5人を含め計8人のチームが合流した。だが、今度は税関がなかなか通らない。いったん、救援物資を街の真ん中の税関倉庫に入れることになった。輸送に同行し、封印を確認した。

6月3日・物資輸送

フライトは午前10時の予定。私を含めた5人が現地へ向かうことになった。第二陣が持ってきた1050kgの物資を仕分けをして運び出す。役所が救援用としてバスを用意してくれた。書類が整っていると思っていたものの、バスを空港に乗り入れる許可が出ない。この日もサハリン日本協会のヤン教授の手助けで、午後4時半に飛行機が離陸した。

オハでは2チームに分かれることになった。私は、1tの医薬品をオハ中央病院に届けることになり、残りの4人がネフチェゴルスク入りを目指す。ネフチェゴルスクでは、現地の医療グループに医薬品50kgと被災者に毛布120枚を配る予定だ。この日は、ともかく寒い。みぞれ混じりの空模様である。

病院には、読売新聞の記者がいて通訳を頼む。当初、病院の医師たちは、いったい何をしに来たんだという冷たい視線を送ってきた。医師はたくさんいるのにという意識もあるらしい。また、NGOというものがどういう活動を行うのか概念がないのだろう。彼らもただで物をもらおうというのが、プライドに引っかかるみたいだ。しかし、不足している医薬品を実際に見せ、薬品庫に運び入れるのを私が手伝い始めると、がらりと表情が変わった。

最後には、「何か記念のものをお返しに贈りたいのだが、何もないんだよ」という言葉が返ってきた。

この日は、この新聞記者のホテルにお世話になる。

6月4日・陸路

読売新聞の記者とともに陸路、ネフチェゴルスクに向かうことになる。現地へ入ったチームが無事帰れたことを確認したためだった。先行チームが陸路で戻るなら途中ですれ違ふし、現地に入れば何か情報があると判断した。

道はひどい。坂道はどろどろで、この普通車で突破できるのだろうか。泥にはまっていると、ネフチェゴルスク方面に向かうトラックを改造したバスが引っ張ってくれ、なんとか抜け出す。それも2度。途中、活断層が動いた跡がはっきり分かる亀裂の上を通過した。

私と同じジャケットを着た日本人がヘリで帰ったことを確認。私も同じコースでユジノサハリンスクに戻る。ホテルに入ると午後10時半。何も口にしていない1日だったので、急いで食べ、途中からミーティングに参加する。

6月5日・帰国

すでに、税関の役人とも顔なじみ。スムーズに出国できた。ラリサ健康局副局長も別れの挨拶にきてくれ、この美人副局長の熱烈な抱擁を受けた。

透析機

日本政府が、透析機2台を現地に送ったことを報道で知った方もいると思う。役に立ったのだろうか。これが、今回の出動で一番の心残りとなっている。

5月30日、外務省の2人が透析機2台をユジノサハリンスクに運んできた。これは、市内の税関倉庫に直行。しかし、利用するならばすぐにも設置作業をしなければならない。

サハリン州で透析機が置けるのは、

サハリン中央病院だけである。つまり、ここしか配管の設備がないからだ。そのこともあって、ロマノフ中央病院院長や健康局も動いてくれた。理解してくれた外務省の担当者も現地で掛け合ってくれた。

6月1日の夕方になって許可が出た。連絡を受けた早川医師らが、あわてて税関倉庫に向かった。扉を開けると、そこには透析機はなかった。知っている人間を探して「どうしたんだ」と聞くと、「ロシア緊急事態省の決定で、オハに送った」という。

ロマノフ院長も、こうなれば権限外だし、外務省も内政干渉になるとしてこれ以上の行為はできなかった。

問題の透析機は、日本人が指導しないと動かせないものだし、オハに送っても利用できないのは、目に見えている。オハ中央病院に設置するには、多分機械を買うのと同等の金額で工事が必要になるだろう。

あとで、オハ中央病院に緊急医療活動で行った日赤の医師に聞いた。「あんなもの使えないよとロシア人のドクターから言われた」と話していた。

現地調査もなしに物を送るのは、AMDAが最も恐れていることである。そのために、一刻も早く現地入りし、そのニーズを把握してから物資を送ることが必要だ。いくら必要なものだといっても現地の実情に合うものでないと、また無駄になってしまう。

たとえば、早川医師はサハリン中央病院の処置をしながら、日本のどのような透析物品なら現地で使用可能か細かいレポートを本部に送っている。

また、6月7日には生活物資を運ぶ第三陣が現地入りしている。



6月4日ネフチェゴルスクからオハへ戻る。中央の患者をヘリコプターでオハ中央病院へ運ぶ様子だ。左は第二陣で現地入りした秋山一誠医師、右は現地のロシア人医師。

緊急救援というのは、言葉は悪いがどこか華々しいところがある。ある意味で私たちの活動は目立つ。しかし、それは大変多くの人たちが背後にいることを忘れてはならない。

たとえて言うなら、ロケットの打ち上げのようなものだ。宇宙へ行くアストロノーツは注目されているが、それを支えるのは管制官やエンジニアだけでなく、もっと多くの活動支援者がいる。今回もコントロールセンターとなる本部だけでなく、飛行機を飛ばしてくれた岡山県航空協会をはじめ、各方面の方々、さらに一般の市民の方々の多大なる支援があって、初めて、これだけ早く入国できたし、活動も展開できた。

震災に遭った神戸からは多くの毛布がAMDA本部に送られ、サハリンの被災民の手に渡り、同じ被災民からの贈り物として彼らの感謝と感動を呼んだ。

ただ、付け加えるなら、モノだけが大量に集まるのは困る。それを運ぶには飛行機のチャーターやその他に多大な費用が必要だからだ。帰国後、物品やボランティアだと思っていた人の人件費などの請求書が次々と届き始めている。AMDA本部はかなり頭を痛めている。

6月14日に発表された現地からの報道によると、死者は1989人、生存している住民は1208人だという。悲劇の街は閉鎖されることが決まっている。